

危機の状況

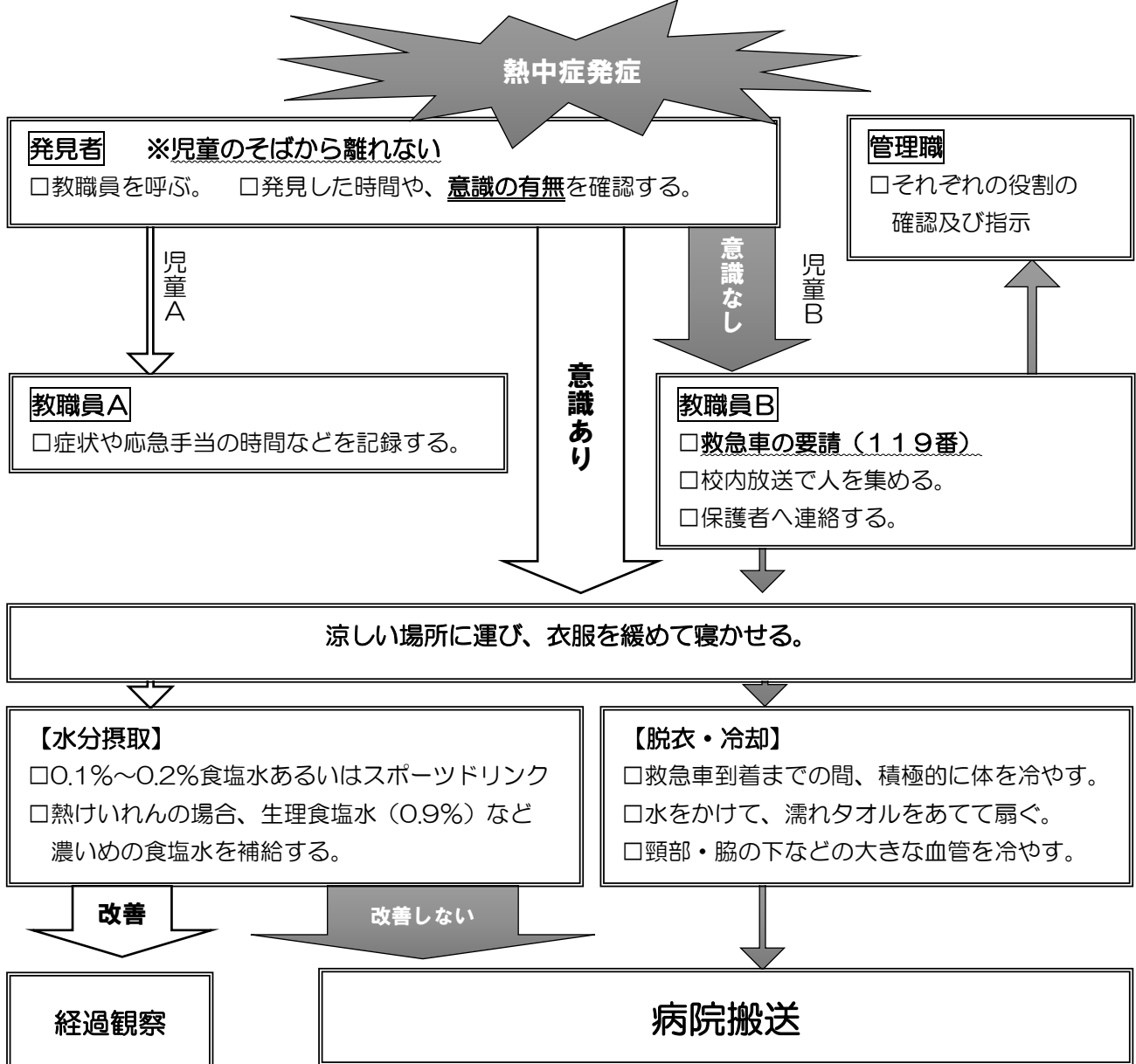
熱中症を発症した場合

1 危機対応の方向性

- 1 意識の有無を確認し、必要に応じて救急車を呼ぶ。
 - 2 涼しい場所に移動させて、衣服をゆるめ、水分や塩分を補給する。
 - 3 人を集めて、連絡・記録・応急手当を進める。
 - 4 他の児童を安全な場所へ移動させる。
 - 5 足を高くして、体を冷やし、経過観察をする。
- ※ 発症後、意識がない場合は、ただちに救急車を要請する。

2 危機対応の具体

学校内において、熱中症を発症した児童がいる場合、指導者は次の行動をとる。
なお、児童の不安を軽減するためにも、声のトーンや速さに気を付け、冷静な対応に努める。



3 予想させる危機の状況

梅雨が明けて、急に暑くなってきた。気温は30℃、湿度が70%で、風はあまりふいていない。休み時間になると、児童は校庭で元気よく遊びはじめた。しかし、急に運動をしたため体温が上昇して、脱水症状を引き起こした児童が、その場に倒れこんだ。至急救職員を集めて、児童の応急手当や救急車を呼び、他の児童についても、安全な涼しい場所へ避難させる必要がある。

【起こしたくない最悪の事態】

- ・意識障害があり、四肢が硬直してしまう。
- ・同様の症状を訴える児童が、複数名現れてしまう。
- ・要請した救急車がなかなか到着せず、容態が悪化してしまう。

4 危機予想の背景

熱中症とは、熱に中る（あたる）という意味で、暑熱環境によって生じる障害の総称である。熱中症にはいくつかの病型があるが、重症な病型である熱射病を起こすと、適切な措置が遅れた場合、高体温から多臓器不全を併発し、死亡率が高くなる。

近年、学校の管理下において児童生徒等の熱中症による死亡事故が発生しており、日本体育・学校健康センターの資料によると、昭和50年から平成13年までの27年間に135件（年間平均5件）に上る。学校の管理下における熱中症は、大半が体育・スポーツ活動によるものだが、それ以外でも発生している。特に、高温環境下の夏の屋外、気温・湿度の高い体育館等における運動や部活動の際に、多く発症している。（参照「熱中症を予防しよう」（文部科学省・独立行政法人日本スポーツ振興センター））

5 熱中症予防運動指針

独立行政法人日本スポーツ振興センターが発行する「熱中症を予防しよう」を参考にして、運動の目安を判断する。

＜参考＞熱中症予防運動指針

WBGT ℃	湿球温度 ℃	乾球温度 ℃	運動は 原則中止	WBGT31℃以上では、特別の場合以外では運動を中止する。特に子どもの場合には中止すべき。
31	27	35	厳重警戒 (激しい運動は中止)	WBGT28℃以上では、熱中症の危険性が高いので、激しい運動や持久走など体温が上昇しやすい運動は避ける。運動する場合には、頻繁に休息をとり水分・塩分の補給を行う。体力の低い人、暑さになれていない人は運動中止。
28	24	31	警戒 (積極的に休息)	WBGT25℃以上では、熱中症の危険が増すので、積極的に休息をとり適宜、水分・塩分を補給する。激しい運動では、30分おきくらいに休息をとる。
25	21	28	注意 (積極的に水分補給)	WBGT21℃以上では、熱中症による死亡事故が発生する可能性がある。熱中症の兆候に注意するとともに、運動の合間に積極的に水分・塩分を補給する。
21	18	24	ほぼ安全 (適宜水分補給)	WBGT21℃未満では、通常は熱中症の危険は小さいが、適宜水分・塩分の補給は必要である。市民マラソンなどではこの条件でも熱中症が発生するので注意。

1) 環境条件の評価にはWBGTが望ましい。

2) 乾球温度を用いる場合には、湿度に注意する。湿度が高ければ、1ランク厳しい条件の運動指針を適用する。

※「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック（公益財団法人日本体育協会）平成25年4月改訂」

独立行政法人日本スポーツ振興センターホームページより＜参考＞

<https://www.jpn-sport.go.jp/anzen/default.aspx?tabid=114>